
はじめに

一昨年初め、私は突然にドイツのハイデルベルグ大学日本研究所のザイフェルト所長から同年9月開催の国際シンポジウム「竹内好をめぐる諸問題」への招聘を受けていささか戸惑った。一つには私はザイフェルトさんを全く存じ上げないこと、二つには私が竹内好に強い関心を抱いていることはごく限られた人しか知らない筈であること、三つにはどうしてドイツの大学が竹内好に関心を寄せるのかということ、こうしたいくつかのことが私の理解を超えていたからである。

1977年に竹内好が世を去って既に四半世紀以上の時間が過ぎ、日本では竹内好が残した課題を改めて取り上げるシンポジウムは一度も開催されて来なかった。70年代から21世紀へ、この間、日本社会は大きく変貌を遂げた。社会的プロテストの運動は大学のキャンパスから、また企業の労働現場から、さらには街頭からほぼ姿を消した。新たな思想や文化の提起を担うべき論壇の力は極度に衰弱し、保守的論調のみが週刊誌や月刊誌を賑わせるようになった。情報社会化が驚異的に進み、子供は家にこもってテレビゲームに熱中し、外気に当たる遊びをすれば「未成年略取、殺害」の危険に晒されるようになった。60年代から80年代まで続いた日本の高度経済成長によって、農林漁業の切捨てが加速的に進み、いまや大地や山、海の自然と生き物を相手とした人々の暮らしは人口の5、6%を占める人々に限られるようになった。

竹内好が日本で忘れ去られて行きつつあることと、こうした日本社会の巨大な変貌は連関しているという思いが私にはあった。

2004年9月、私はハイデルベルグのシンポジウムに出席し、いっそうの驚きを禁じえなかった。シンポジウム会場には参加者の著作が並べてあり、そのなかに私が86年に刊行した著作もあったのだが、ザイフェルト所長はその一部、竹内好に関する叙述の部分を開いて見せてくれた。そこにはたくさんの書き込みがなされていたのである。さらに岡山麻子さんというまだ年若い女性の研究者の著作『竹内好の文学精神』も並べられていて、私はその本の存在を知らなかった。手にとって一読し、その内容の豊富さに感動を覚えた。加えて中国からの参加者である孫歌さんの著作も並べられていて、私は孫さんとは顔なじみではあったけれど、うかつにもその時点では孫さんの竹内好への高い関心を知らずにいたのである。孫歌さんはこのシンポジウムの翌年、2005年に『竹内好の逆説』（中文で『竹内好的悖論』）を出版して、日中両国の学界に波紋を呼んだ。私と同じ驚きはもう一人の参加者、松本健一さんにもあったようだった。松本さんはまだ竹内さんが存命の1975年に『竹内好論——革命と沈黙』を出版し、私も多くを教えられた記憶があった。

私はこのシンポジウムに参加して深い幸福感を味わった。竹内好がドイツでこれほどに記憶され、問題視されていること、シンポジウムの課題の提出の仕方、一つは「アジア主義」の問題、一つは竹内好の提起した「近代」とは何か、それがどのように今日のヨーロッパと関係するか、という問題。「アジア主義」や「近代」の課題を通じて現在のヨーロッパを問題視する形で提起されていること、そこにこの会議の主催者の深い問題意識を感じたのである。

このシンポジウムの翌年2005年末、今度は中国で孫歌さんの問題提起を受ける形で竹内好を論じるシンポジウムが上海で開催された。私はなぜドイツと中国で竹内好なのか、と考えた。

ハイデルベルグでの滞在1週間、私は何度かタウン（市内）を散策する機会があった。タウンの静謐なたたずまい、明確に歩道と車道とが分けられ、歩道という歩道にはオープンテラスが広がり、明るい日差しを浴びて市民が談笑する姿、高層ビルが全くなく、緑に囲まれて心地よい風が吹き、数百年の歴史をそのままに残した町並み、大学と市街が一体化しているさま、そのすべてに私は魅了された。ドイツは原子力発電の廃止を決め、風力発電を始めとしてエコ・エネルギーの開発に全力を上げている。

ドイツが18世紀以来のヨーロッパ近代の道、竹内に言わせればヨーロッパの終わりのない「自己実現と自己拡張」の道を、今日ある決意をもって撤回しつつあること、そのことがハイデルベルグという小さなタウンの中に私は感じ取ることが出来た。「アジア主義」と「近代」と「今日のヨーロッパ」がテーマに選ばれたのはそのために違いない。

中国に孫歌さんが現れ、竹内好を通じて中国の学界に投げかけた問題も、同じ決意からではないか、と私は思った。1980年代に始まった中国の高度成長は、90年代から21世紀を迎えて、人類史上類例がないほどの物質的近代化をもたらしつつある。しかし、その姿の中に、かつて日本が歩んだ道、竹内好が「自己喪失の過程」と呼んだと同じ人間の空疎化が進んでいることを私は感じていた。孫歌さんを通じて、私は日本人がこの間、忘れてきた大事なものを突きつけられた思いがした。

本シンポジウムの開催を決意したのは、以上のようなこの約2年間の私の経験がきっかけをなしている。シンポジウムの開催にあたり、過去、竹内好に関する著作を刊行したことのある方々、いずれもその著作から私が多くを教えられた方々をお招きすることにした。孫歌さん、松本さん、岡山さんに加えて、鶴見俊輔さん、溝口雄三さん、菅孝行さん、黒川創さん、それに上海シンポジウムを成功させた張寧さん、薛毅さんの面々である。

以上の9名の方々は、2日間をかけて精力的かつ情熱的に竹内好を縦横に論じてくださった。当日会場に足を運んでくださった方々も含めて、主催者として改めて心からの感謝を申し上げたい。

愛知大学国際中国学研究センター所長・COE 拠点リーダー
加々美 光行